

4 木 製 品

木製品は、土壙 SK820・SK870・SK2101・SK2102, 井戸SE2278 などから発見した。なかでも SK820 からは大量の木製品を検出した。

- これらの木製品の多くは破損しており、原形を保つものは少ない。製品の形態も多様で、種類および用途を的確に把握することは困難である。また、他の素材の遺物と異なり、材の再利用が頻繁におこなわれていることから、材料・未成品・製品の選別もむつかしい。ここではこれら多数の木質遺物から、一定の目的で加工を施した木製品をえらんで記述することにした。まず木製品の加工法を概観し、ついでSK820 出土の一括遺物をのべたのち、SK2101 ほかの遺構から出土した木製品におよぶことにする。

* A 木製品の加工 (PL. 75)

今回検出した木製品の多くはヒノキを材料としており、それ以外に少数の広葉樹材がくわわる。材の加工には各種の工具が使用されたであろうが、その種類をはっきりと指摘できるものはそう多くない。いまは、材の表面に比較的明瞭な加工痕跡をとどめる若干の遺物をえらび、基礎的な加工工程をのべよう。

- * 切 断 (205・206) 材を木理に直交して2分割する加工法である。205は鋸を用いた例で、丸棒(直径4.3cm)の両端に、鋸びきの切断面をとどめる。切断面は平滑面にならず、鋸の進行方向にそって多少の凹凸面を呈する。なお、同種の材に切りこんだ歯あとをもつ他の例によると、鋸の歯幅は0.25cmであった。206は小刀をもちいて切断した例であって、細板の四面から断面V字状の刻み目をいれて、材を細くしたのち、手で折ったものである。この種の切断例は比較的多く、小板片を加工する場合の一般的な手法である。

鋸小刀による切断

割 り 裂 き (108・120・144) 材を木理方向で2分するには斧・鉈などをもちい、割り裂くことが考えられるが、それらの工具を識別することは困難である。120は丸太を割って板にしたもので、その表面は木理が凹凸する粗面をなしている。おそらく楔をもちいて斧で割り裂いたのであろう。なお、四角の穴は^{いかだ}筏穴であろう。144も割り裂きの痕跡をとどめる好例で、

斧・鉈による割り裂き

- * 板材に加工したもの(PL.72)。108は不用になった箱蓋から木札をつくる例であり、鉈のようなもので割り裂いている。なお、割り裂きは、板材をつくるための基本的な加工法であり、大は井戸枠などの大型のものから、小は檜扇や削り掛けの薄板まで各種の遺物にみとめられる。

削 平 (102・122・203) 材の表面を調整する工具には、手斧・鉈・小刀が考えられる。柱や井戸枠材など大型の材には、表面を粗く整えた手斧の痕跡をみることができる。203は手

手斧・鉈・小刀と削平

- * 斧で尖らした杭の先端である。鉈と小刀のいずれによる加工かを区別することは困難である。しかし、曲物の蓋・底板のように削平面が広い場合には鉈を用いたことがわかる。102は曲物の蓋の例である。削平面の狭い場合には、小刀を用いており、木筒には普遍的にこの痕跡をみることができる。122は切り欠き面を小刀で調整している。

研 磨 (PL. 71-74) 刃物で加工したのち、材の表面に磨研をほどこしたのものがある。

トクサによる表面磨研

- * 74はくりものもの杓子で、その表面を木賊^{とくさ}で磨研している。

ロクロびき (PL. 74—197・198・199・201,75-200) ロクロびきの木製品が若干ある。製品のほか、ロクロびきの木屑もあり、それらのうち200は同心円状のロクロ目をよくとどめている。

鑿・錐・小刀による穿孔

穿孔 (PL. 66—37, 71-4, 72-118・122, 75-42・118・122・202) 柄穴のような大きい穴は鑿であける。118は角材に方形の柄穴をあけた例。普通は錐で穿孔する。曲物の底板をとりつける木釘穴など直径0.2cm内外の比較的小さな穴は、四ツ目錐をもちいるようである。122のように直径が0.9cm程度の大きい穴の場合には、壺錐や刃先が三股にわかれる鼠刃錐の使用が考えられる。42の糸巻梓木の穿孔には、鼠刃錐を使っている。また小さな穴の場合、202のように小刀の刃先で穿孔したり、曲物の綴じ穴のように刃先で切り目をいれる例もある。

鑿をもちいた切り欠き

その他 (PL. 75-42'・122) 柄や切り欠きをつくるには鑿を使う。122は切り欠きの例で、鑿で切り欠き小刀で表面を調整している。42'は小刀で花卉形のえぐりをいれたものである。*

B SK820出土木製品 (PL. 63~73)

SK820で出土した木製品を用途別にわけ、服飾具・祭祀具・工具・紡織具・食膳具・容器・部材・用途不明木器・その他に分けてのべる。それらは、ヒノキ材の白木づくりであり、塗り物などの製品はきわめて少ない。

i 服飾具 (PL. 63~65)

ひおうぎ

a 檜扇(1~3) 糸柱ヒノキの薄板を用いた白木の檜扇。3個体分出土。1の骨は11枚。骨はいずれも厚さ0.1cm弱で、要部分の幅約2.0cm、末部分の幅約3.0cm。骨の長さは一定せず、中央骨2枚が32.3cmでもっとも長く、左右の骨は長さを次第に短くし、左端・右端ではそれぞれ22.6cm、25.1cmである。広げたときの形はいわゆる扇形になる。中央2枚の縁端を直線にし、左右の縁端は切先状につくる。骨の下端は半円形にそろえ、下端から約2.2cm上に要の孔をあける。要付近の両側縁にV字形と弧形の切り込みを交互にいて飾る。飾りの切り込みは左右対称でなく、一側縁の切り込みが一個所多い。要から末に向って約16cmの位置に0.5cm内外の間隔をおいて、縦の切り目2個をいれる。綴り目である。要の固定方法、綴りの方法については知るすべがないが、扇縁の曲線にあわせて広げた状態に配置すると、約55度¹⁾に開きその最大幅は約19cmとなる。*

2も1と同様の製品であるが、やや小振りである。骨は7枚残存。骨の厚さは0.1cm内外、要部分の幅約1.5cm、末の幅約2.7cm。骨の長さは中央寄り20.6cm、端の骨で19cm。扇縁の形状をとどめるものが4枚あり、そのうち中央寄りの骨3枚が山形、端の骨1枚が切先状である。骨の下端から約0.8cm上に約0.7cmの間隔をおいて横列する2孔の要をうがつ。端の骨では、この2孔間に0.3cm幅の変色していない部分があり、2孔を糸などで固定したことがうかがえる。要から末に向かう約14.2cmの位置に約0.5cmの間隔をとって切り目2個を縦にい

1) 最古の伝世檜扇は、東寺千手観音菩薩像の胎内に納入していた檜扇で、元慶元年(877)の銘がある。その形状は末を直線に裁ち落とした同大の薄板20枚からなる(丸尾彰三郎他『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代 造像銘記篇1』1966年)。このような伝世の檜扇は骨数が20枚を越

すので、開くと横長になる。それに対して、長さを異にする薄板を用い、骨数が少なく開くと縦長になる平城宮檜扇と同じ形式のものは伝世品のなかに見出すことはできない。形状では、絵巻物にみる平行四辺形の団扇(たとえば「信貴山縁起絵巻」『日本絵巻物全集』II)に似ている。

れ、綴り目とする。骨の下半の両側縁には内彎する浅い弧状の切り込みをいれるが、一側縁の切り込みが少し長い。この檜扇は、残る7枚で復原すると最大幅12cmに広がる。ただ、1のように11枚が本来であるとするならば、最大幅は約20cmになるであろう。3は檜扇の基端部分のみをのこす。現状では木釘で固定した薄板が円形にひろがる。薄板の現状の長さ7cm前後、幅1.5cm前後、厚さ0.5~0.7mm。

* 後、幅1.5cm前後、厚さ0.5~0.7mm。

b 檜扇形木製品(4) 4は前記の檜扇とは用途を異にするとおもわれるが、形態が檜扇に類似しているため、いちおう檜扇に準じて説明したい。4枚の板目の薄板を檜扇のように連続して用いるもの。いずれも長さ21.0cm、幅1.8cm前後、厚さ0.3cm前後の薄板を粗く削って仕上げ、部分的には製材時の割り面をとどめる。薄板の下端は直截にし、下端から上1.5~1.8cmの位置に直径0.1cm程度の孔を錐であける。この孔の上部11.0cm程度の位置にも下部と同形の孔をうがつ。上端は山形に削り、下端から上1.5~2.0cmの間隔をおいて、一側縁に長さ5.1~8.5cm、深さ0.5cm程度の内彎する弧形のえぐりをいれる。

薄板の表裏には墨書がある。下部のえぐりのある側縁を右向きになるようにして各板を配列すると、各板の上部の孔から2cm上方に墨書の「=」が横にならぶ。また、孔の下部におおの意味不明の文字を墨書する。うち一枚にはその字にかさねて一字を増し、下部の孔の周囲を「○」でかこむ。反対側の面には一枚のほかは墨書がない。墨書する一枚は、上から「贅」を扁、「吉」を旁とした字を4字、「伎」字を4字、「困」字を2字、合計10字を縦書きにし、下部の孔の周囲を「○」でかこむ。このような墨書の状況から判断すると、下部の孔を「○」印でかこむ板面が、数枚の薄板を重ねたときの上・下面となり、一種の親骨の役割を果たしているらしい。それに準じて各薄板を広げると、「=」および意味不明の墨書が一面に揃う。以上のことから、この具が紐で連続し檜扇のように開閉する具であることが推される。文字は意味をなさず、粗製で実用に耐えないことからすれば、一種の呪具であろうか。

c 櫛(5~11) 板目材に鋸で細い歯をひきだし、表面を平滑に研いだ横櫛である。7点出土している。いずれも破片であるが、平面形によって、長方形のものA型式(5~8)、半円形のものB型式(9~11)に分けることができる。

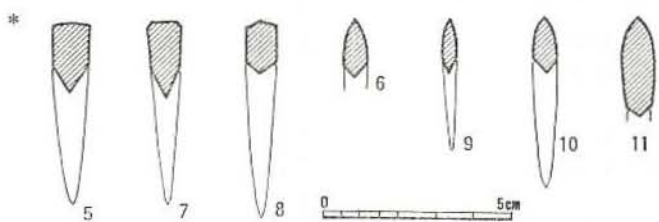


Fig. 45 櫛の断面形 縮尺1/2

型式	資料番号	幅	高さ	厚さ	歯長	3cm 当り 歯数
A	5	(10.3)	4.80	1.02cm	3.60	26
	6	(3.5)	—	0.76	—	30
	7	(4.0)	5.25	0.90	4.00	27
	8	(3.0)	4.90	0.94	3.80	30
B	9	(3.0)	3.43	0.46	2.45	30
	10	(3.5)	4.55	0.70	2.90	30
	11	(7.3)	—	0.98	—	31

単位cm ()は残存値

Tab. 11 櫛の法量

ものB型式(9~11)に分けることができる。

A型式には、さらに肩部をまるくするもの(7)と、角張らすもの(5)とがある。B型式は概して精製品であって、むねの断面形が柳葉形を呈している。また切り通し線は、むねの上縁に平行して曲線を呈するものと、直線形になっているものとの両者がある。櫛の個々の法量は表示(Tab. 12)するとおりである。

とめばり
形木製品

d 留め針形木製品 (12~25) 一端を尖らした細長い棒状の具。14点出土。それらは形状から、A：頭部を鋏頭状にするもの、B：頭部を細板状にするもの、C：頭部を棒状のままに切りおとすもの、D：両端とも尖らすものにわけられる。

A型式は2点ある。12は自然木の樹皮を除く程度の加工で、頭部と身の一部をとどめるが、下半は切断されている。身が太いので、あるいは未成品の可能性もある。13は身部を扁平にするが、下端は欠失のため不明。B型式は1点(14)ある。全長の約2/5を細板状の頭部とし、身部は断面楕円形の細棒につくる。細板状の頭部には、3条の刻線をめぐらす。刻線の下部には、両面ともに冠帽をつけ弓状のものを手にする横向き男子の立像を墨描きし、足下にあたる細棒付根に墨で2線をめぐらす。一面には、2線の下に1字を書いているが読めない。C型式は10点(15~24)あるが、身の形状によって、身を扁平にするもの(C₁)と丸棒状にするもの(C₂)とに区分できる。C₁型式は5点ある。15は身部の一面に鑄をとおし、断面を三角形にする。身の先端に向けて次第に薄くし、先端の平面形は舌状につくる。頭部は、幾分厚くかつ幅広く削り残している。16・17も15と同じ作りであるが、17は頭部を欠く。18・19は身部を刀身形に、その断面を三角形につくる。切先状の身の先端は薄い。C₂は5点ある。いずれも材の一端を錐先状に尖らす。身の横断面形は角形・半円形・円形につくる。おおむね頭部に特別な加工をほどこさないが、なかには頭部を出柄風に突出させたもの(24)がある。D型式は1点(25)ある。断面円形の細い丸棒で、中央部分を太目に残し、両端に向けて次第に細くする。なお、両先端は鋭く尖がらさず、木口面をのこす。

以上の木製品は、一種の留め針的機能を果すのであろう。このうちには、C₁型式のように冠帽や髻をとめる木針と考えられるものもあるが、すべてが服飾に関するものとはいきれない²⁾。個々の法量は表示(Tab. 13)のとおりである。

型式	資料番号	全長	身幅	身厚	身の断面形
A	12	5.50	0.90	0.30	扁平
	13	6.00	1.20	0.80	楕円
B	14	16.92	0.55	0.25	楕円
C ₁	15	19.40	1.10	0.80	三角
	16	17.10	0.92	0.50	三角
	17	(14.30)	0.95	0.50	楕円
	18	(12.70)	0.70	0.30	三角
	19	15.10	1.05	0.50	三角
C ₂	20	15.20	1.50	0.70	楕円
	21	16.90	0.90	0.90	円
	22	9.50	0.80	0.60	台形
	23	13.30	—	—	半円
	24	16.60	0.75	0.50	角形
D	25	13.40	0.75	0.50	円

単位cm ()は残存値

Tab. 12 留め針形木製品の法量

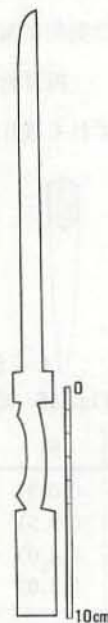


Fig. 46
刀形の復原
縮尺 1/3

2) この種の留め針形木製品は髪飾りの可能性が
つよい。オドリカンザンといって盆踊りのとき
竹箸をカンザンに用いる民俗例もある。民俗学
研究所編『総合日本民俗語彙』(1955年)第1巻

p. 266。北海道アイヌの民俗例では、留め針形
木製品C型式類似品に削りかけをほどこし家の
神を祀るための花奠蓋をとめている。宮本豊太
郎他『日本の民具』第4巻周田民族1967年p. 66。

ii 祭 祀 具 (PL. 66-26~32)

- a 刀形(26~28) 3点ある。26は鉄製刀子を忠実に模したもので、全体のおよそ2/3を刀身とし、残りを茎とする。刀背は茎の下端までまっすぐとおす。刃の部分はゆるやかな弧線を呈し、関の身幅がもっとも広い。刃関は直角にせず、茎端に向けて次第に茎幅を狭くする。ヒノキ板目材。全長14.2cm, 最大幅1.8cm, 最大の厚さ0.5cm。 かたながた
- 27は26にくらべて粗いつくりである。細板材の上半部分を刀身形につくる。柄を着装した状態を模したのであろうか。刃の部分は刀背よりやや薄い程度である。身と柄との明瞭な区別がなく、柄頭は両面と刀背方向から切りおとした状態にとどめる。全長15.4cm, 最大幅1.0cm, 厚さ0.8~0.2cm。28は鏝から先端にかけての部分に欠失する木刀の柄。柄頭部分を長方形に削りのこし、把の部分を弓形にする。宮内から出土している類例によると把の接する鏝も長方形に削りのこし、幅の狭い刀身を削りだしている (Fig. 46)。ヒノキ板目材。現存の長さ13.8cm, 幅2.9cm, 厚さ0.6cm。
- b 鍔形(29) 長頭鍔を模したもので、身の中央部分を平滑にし、両側縁に刃をつける。身の下辺に逆刺をつけ中央にのかつぎ なかご篋被と茎をつくる。ヒノキ板目材。現存長12.0cm, 厚さ0.4cm。 やじりがた
- * c 利器形(30) 薄い木片から削って作り、一端を尖らし他端をまるくする。剣か鉈の身部分をあらわしたものであろう。ヒノキ板目材。長さ9.9cm, 現存の幅1.6cm, 厚さ0.3cm。 りきがた
- d 人形(31・32) 2点出土した。31は薄板から左向きの横顔をきりぬいたもので、後頭部をまるくし、前頭部に切りこみをいれて帽子をあらわす。板の上面には、墨で帽子・眉・目・耳などを描くが、額以下の部分は現在欠失。下面には「□養」の墨書があり、木筒を転用したものである。ヒノキ板目材。現存の長さ6.4cm, 現存の幅2.5cm, 厚さ0.3cm。 ひとがた
- 32は柱状の小木片を加工したコケシ風の人形。刻目をいれて頭部と胴部とを区分し、正面の顎を少し尖らせ胴部の下半を細くする。前頭部から後頭部にかけて墨を塗って禿ふうの頭髪をあらわし、顔面には眉・目・鼻・口を墨描きする。胴部には手足を表現せず、正面に記号風の二字を墨で縦書きする。ヒノキ材。長さ6.3cm, 最大幅1.1cm, 最大の厚さ0.9cm。
- * 形代として、人形・武器・工具などをつくり、祓い・招魂などの祭具に用いることはいうまでもない。『延喜式』神祇条でいう祈年・月次の祭に供する「倭文纏刀形・絶纏刀形・布纏刀形」は、木製模造の刀形である可能性がよい。なお31・32と同類のひとがたは、藤原宮においてすでに存在し、また後代にもつくられ、元興寺極楽坊の中世遺構から出土している。³⁾⁴⁾

iii 工 具 (PL. 66-33~37)

- * a 刀子柄(33・34) 刀身を欠く刀子の柄である。2点出土している。33は細長の木片を粗く削って加工したものである。柄の中央部分で背の方向に腰を折り、柄頭は粗削りのままである。柄元部分の断面は楕円形を呈する。茎孔は欠損のため断面形は不明だが、おそらく三角形になるのであろう。ヒノキ材。長さ14.5cm, 最大幅1.4cm, 最小幅1.2cm, 厚さ1.0cm, 茎孔の深さ2.6cm, 茎孔の幅0.3cm。34は柄元部分が欠損している。断面を楕円形につくり、背 とうすのえ

3) 奈良県教育委員会『藤原宮 国道165号線バイパスに伴う宮城調査』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25冊)1969年 PL. 16-1・2,

PL. 50-1・2。

4) 元興寺極楽坊『元興寺極楽坊総合収蔵庫(第一収蔵庫)建設報告書』(1965年) PL. 35-7・8。

の方向に腰を折る、茎孔の断面は三角形を呈する。(33)にくらべて加工は丁寧である。柄頭付近に「四文」の針書きがあり、この刀子の価格かもしれない。広葉樹材で作る。現存の長さ10.2cm, 幅1.3cm, 厚さ1.1cm, 茎孔長径0.5cm, 茎孔短径0.2cm。

b 工具柄(35) 現在、刃部を欠失。断面が長方形の角棒で、縦に割れており、茎孔の様子がわかる。茎孔は一端の木口から穿ち、断面長方形、茎を焼き入れたためか内面は焦げている。この木口付近に切込みをめぐらし、柄の中央部分断面はやや丸味をもつ。茎孔の形状および中央部の断面形によって刃部が錐のようなものであることがうかがえる。柄元の切込みは、木口に縦割れが生じたので針金や、紐などで固定したためのものであろう。正倉院には柄元を補強した工具が⁵⁾のこっている。ヒノキ材。長さ17.7cm, 長径1.5cm, 短径1.2cm, 柄元の茎孔の長径0.5cm, 短径0.3cm, 深さ2.5cm。 *

すみさし c 墨 刺(36) 粗割りの面をのこす小木片を墨刺として利用したもの。長方形の薄い木片の一端を墨付部分とし、両面から削って刃をつけ、烏口のように刀先から切り目をいれる。刃先からの切り目は、墨のたまりを容易にするためのもの。墨付部分には、現在も墨痕が付着する。なお、柄部の先端は折損している。現存の長さ9.6cm, 幅1.0cm, 厚さ0.4cm。

d 木 針(37) 扁平な木片を粗く削って仕上げた木針。先端を細く尖らし、一側縁は刀身のようにやや反りをもたす。頭頂は切りおとしのままで、頭頂から1.8cm下方に針孔を穿つ。針孔は、鋭利な刃先で一辺約0.4cm程度の方形にくりぬいたもの。ヒノキ材。長さ13.2cm, 頭部幅0.9cm, 厚さ0.4cm。現在、莖針として用いているものと変わらない。 *

iv 紡 織 具 (PL. 67-38~45)

いとまき a 糸 巻(38~43) 回転させて糸をまく道具である。構造は数本の梓木とそれを固定する横木、横木の心にとおす軸棒からなる。現在、軸棒に該当するものは検出していないが、梓木と横木が6個体分ある。すべてヒノキ材を用いている。糸巻は、A・Bの2型式に大別できる。A型式は、梓木が4本からなっており、各々の梓木の上下2個所に柄穴をあけて横木を装着する。上下の横木は各々2枚の板を十字形に組みあわせ、中心に軸孔をあけ、四枝を棒状に削る。この種類の糸巻は、梓木の長さによって、長さ28cm前後のもの(A₁型式)と長さ24cm前後のもの(A₂型式)とにわかれる。B型式は、梓木6本からなり、各々の梓木の上下2個所に切り欠きをいれて横木を装着する。横木は、六角形一枚板で、中心に軸孔をあけ、六角形の各稜角に切り欠きをいれる。つまり、梓木と横木は相欠きの仕口で結合するのである。 *

A₁型式は2個体分(38・39)ある。39は2本の梓木と一組みの横木をとどめる。梓木は断面を半楕円形につくり、外面は丸味をもたせ内面を平滑にし、背の線は上下にまっすぐとおる。上下端では、内面から背に向けて外反りに削り、両端の側面形は、刀身形になる。梓木の内面の上下2個所に鼠刃錐で柄孔をあける。1本の梓木は、2つの柄穴の間の内面を削りこんで内彎させる。梓木の長さ29.1cm・28.9cm, 最大幅1.0cm, 最大の厚さ1.4cm, 2柄孔間の中心の長さ14.1cm, 柄孔の直径約0.6cm, 深さ0.6cm。横木は2枚の長方形板からつくる。まず、板の中央に長方形板の短辺幅の切り欠きをいれ、相欠き仕口で2枚の板を十字形に組む。四端に向けて板の側面を削りこみ、各先端を、丸棒状にする。十字形の中央には軸棒をとおす *

5) 皇室博物館『正倉院御物図録』第15輯(1934年)第36図。

円孔をあける。長さ10.2・10.6cm, 幅2.5cm, 厚さ1.0cm。各先端の直径0.6cm 前後, 軸孔直径約0.6cm。なお, 梓木に横木を装着したときの糸巻の直径は約11cmになる。

- 38は梓木だけ1本ある。基本的なつくりは38と同じであるが, この例では柄穴位置をやや厚くのこし, 両柄孔間は内面から内彎気味に削る。柄孔はいずれも刃物先で浅くえぐる程度で,
- * まだ鼠刃錐で穿孔しておらず, 一端を刀身形にととのえていない。未成品である。全長に比して柄孔間の長さが短いのは, 39と使用方法がことなるからかもしれない。梓木の長さ27.8cm, 最大幅1.0cm, 最大の厚さ1.4cm, 2柄孔間の心心の長さ8.0cm。

- A₂型式は3個体分(40~42)ある。40は1本の梓木と一組の横木をとどめる。梓木は基本的に39と同じつくりである。内面の幅がやや狭く, 中央部分の断面は楕円形に近い。両端は内面
- * から背へ反りをもたせ側面形を刀身形にする。この例では, 2柄孔間に内彎する削りこみをおこなわない。梓木の長さ23.8cm, 最大幅1.0cm, 最大の厚さ1.5cm, 2柄穴間の心心の長さ11cm, 柄孔直径約0.8cm, 深さ0.8cm。横木も39と同じつくりである。横木の長さ8.9・9.2cm, 幅2.0・2.1cm, 厚さ0.8cm, 先端の直径0.6~0.7cm, 軸孔直径0.7cm。横木と梓木を組みあわせたときの糸巻の直径は約10cm。

- * 41は梓木2本をとどめ, 対応する横木はない。この梓木は他と異なり, 両端を尖らさず, 柄孔位置の内面だけを平坦面とし, そのほかは断面円形の丸棒状に削る。なお, 柄孔の一孔には横木の端部が残存していた。梓木の長さ24cm, 最大幅1.1cm, 最大の厚さ1.5cm, 2柄孔間の心心の長さ12.5cm, 柄孔の直径約0.7cm, 深さ0.9cm。

- 42は3本の梓木に上下2組の横木を装着した状態で出土した。梓木の基本的つくりは上述の
- * 諸例と変わらないが, 装飾性に富む優品。装飾は梓木の内面にほどこす。すなわち, 3本とも上下柄孔間の内面から側面形が花卉形になるくりかたをいれ, 内面と両側面が接する稜角を面取りする。柄孔上下の内面には不揃いの加工をほどこす。1本には, 柄孔から両端に向けて, 柄孔間の花卉形くりかたと対応しておのおの2段の弧形くりかたをいれ, 先端をそぎおとして側面形を刀身形にする。他の2本は柄孔から両端に移行する部分を内面から斜めにそぎ, 次第
 - * に幅を薄くする。梓木の長さ23.7~24cm, 最大幅1.2cm, 最大の厚さ1.8cm, 2柄孔間の心心の長さ7.5cm, 柄孔の直径0.8cm, 深さ約1.1cm。横木は2組とも39と基本的にかわらない。全長10.3~10.6cm, 幅1.8cm, 厚さ0.8cm, 先端の直径約0.7cm, 軸孔直径0.8cm。梓木と横木を組みあわせたときの糸巻の直径は約11.7cm。

装飾性に
富む糸巻

- B型式は1個体分ある(43)。現在, 2本の梓木と一枚の横木がある。梓木はやや扁平な材を
- * 用い, 外面に丸味をもたせて削り, 背の線は上下にまっすぐとおる。内面から, 横木をかみあわせる長方形のくりかたを上下にのこす。2個のくりかた間は内彎する弧形のえぐりをいれ, 上下のくりかたから両端にかけて内面から背方向に向けて外反りに削り, 側面形は刀身形を呈する。内面は平坦面にならず両側面から面取りして, 中央に鑿をとおす。梓木の長さ16.6・16.2cm, 幅0.6cm, 最大の厚さ1.4cm。横木は正六角形の小板。各稜角から中心に向かうく
 - * りかたをいれ, 中心部分に軸穴を穿つ。柱目板材。最大径5.0cm, 一辺の長さ2.0cm, 前後, 厚さ0.4cm, くりかたの幅0.4cm, 深さ0.5cm, 軸穴直径0.4cm。梓木と横木を組みあわせたときの糸巻の直径は約6cm。

糸巻B型式

今回検出した糸巻が, 長さ23.8cm~29.1cm, 直径11cm前後の大型のもの(A型式)と長さ

16.6cm, 直径約6cmの小型のもの(B型式)にわかれ, それぞれ構造を異にすることはすでにのべたとおりである。ただ, 両者ともに軸棒などの付属品をのこしていないので, 使用法についてはあきらかにしがたい。つまり, 横木の軸孔に軸棒をとうしこの軸棒を片手で回転する^{わく⁶⁾}いわゆる^{わく⁶⁾}として使用するものか, それとも軸棒を第三の軸受台に接合して回転さすものか判断としないのである。ただ, B型式の糸巻に類似するものは民俗例にある。藪から生糸をとる^{*}「ざくり・おったて・がら」などとよばれる民具は, 軸棒を軸受台に接合しそれにハンドルをつけて回転させている⁷⁾。

b 紡錘車(44・45) 円板の中心に糸巻棒をとおす紡錘車。2点出土。44は榎目の板材からつくる小円板で, 中央に円孔を穿つ。直径6.0cm前後, 厚さ0.6cm, 円孔の直径0.8cm, 重さ(含水状態)17.60g。45も榎目板材からつくる小円板。中央の円孔には, 糸巻棒の上半は欠失し^{*}先端は紡錘車の下面に乳頭状に突出している⁸⁾。直径6.0cm前後, 厚さ0.8cm前後, 現存の糸巻棒の長さ約3cm, 直径1.0~0.6cm。重さ(含水状態)21.15g。

V 食 膳 具 (PL. 68・69・71)

さ じ a 匙形木製品(46~56, Tab.13) 薄い細板から身と柄を削りだした小型の木器。11点出土。匙形木製品とは仮りの命名で, 身の上面が受皿状にならず平坦であることから, 篋・饅^てのよう^{*}な機能も考えられる具である⁹⁾。

匙形木製品は身の形態からA・B・Cの3型式に分けることができる。すなわち, A型式は身の先縁を直線にするもの, B型式は身の先縁を半円形にするもの, C型式は身の先縁を剣先状にするものである。

A型式は, 細板の一端を身とし, 頸部から次第に幅を狭くして柄をつくるもので, 仕上げは^{*}粗い。6点(46~51)出土。身の先縁は片刃の鑿先状につくり, なかには切断が不十分で削りのこすものがある。身の両側縁はとくに整形せず, 側面に割り面をのこすものが多い。身の両面はともに平坦で表裏の別がない。柄は細板の両側を削りこんで幅を狭くする程度で, 断面は長方形。すべてヒノキ材で, 板目材のものが1点あるほかは榎目板をもちいる。この種の匙形木製品には, 身部に使用時の顕著な磨滅痕跡がなく, また身の先縁に刃物で切り目をいれたのち^{*}手で折って切断した形跡をとどめるものがあり, 一時的な使用に供されたものであろう。

B型式はヒノキ板目材の細板からつくるが, A型式よりも精製品である。2点(52・53)出土して^{*}おり, 両者はほぼ同形同大である。身には表裏の別がある。表面は平滑にし, 裏面はわずかに甲高, 先縁を薄くする。先縁は半円形, 身の側縁から頸部に移る折曲点は稜角をなし撥形の頸部につくる。頸部は次第に幅を狭めて柄に移行, 柄は面取りし断面は楕円形に近く, 柄頭^{*}は切りおとす。身の先縁には磨滅痕跡がある。

6) 太田英蔵「紡織具と調庸繩布」(『日本の考古学』M 歴史時代(上) 1967年) pp. 347。

7) 宮本常一他『日本の民具』第2巻 127・128・129。

8) 太田英蔵の教示によると, 本例は「紡錘の軋下」が異常に短小であって, 絵巻物や民俗例にみられるチツリツム・タシロギ用というよりも,

むしろ糸用の可能性があるという。富山弘基・大野力『沖縄の伝統織物』(徳間書店)1971年 p. 39。

9) 和歌山県根来寺の泥饅や広島県明王院の塗師工具はここでいう匙形木器とよく似た形状を示している(中村雄三『図説日本木工具史』昭和42年)。

C型式も、ヒノキ板目材の細板からつくる。3点(54~56)出土。身は扁平に削り先縁を柳葉形に尖らす。身と柄の境は明瞭でなく、頸部の幅を次第に狭めて柄とする。柄は扁平であるが、両端に粗い面取りをおこない丸味をもたせる。柄頭は切りおとしの状態にとどまり、大きさは一定せず、大型のもの54はつぎにのべる杓子形木製品B型式にひとしい。身先縁にはわずかに磨滅痕跡がある。

b 杓子形木器(57~73, Tab.14) 扁平な板材からつくり多くはヒノキの板目材を用いる。いずれも表裏の別なく、概して大型である。17点出土。それらは身の形状によって、A型式身の縁を直線にするものと、B型式 身の先縁を半円形にするものとに分類できる。さらに、A型式は全長20cm 前後の小型(A₁型式)と全長30~70cm の大型(A₂型式)に分つことができる。

* A₁型式は、細板材の一端を直線に切りおとして身先縁とし、両隅にやや丸味をもたす。4点(57~60)出土。身の両側縁から頸部に移る折曲点は稜角をなし、頸部を撥形に削つて柄に移行。柄は両側面から削るにとどまり、側縁を面取りしたり薄くすることはない。身の周縁には若干磨滅痕跡がみとめられる。

A₂型式は、基本的にA₁型式と変わらないが、形状が大きく羽子板状につくる。5点(61~65)出土。転用材の加工が目立ち、箱板を用いて側縁に釘孔をとどめるもの(64)、材から板を割裂いたときの割り面をとどめるもの(61)、墨書のある板材を転用したもの(62)がある。

B型式は、身先縁を半円形につくり、いわゆる飯じやもじにもっとも近い形態。8点(66~73)出土。身は中央部分を厚く、周縁を少し薄くする。身と柄の境は明瞭でなく、両側面から内彎気味に削って柄に移行する。柄はおおむね扁平であるが、中央をやや厚く、側縁を薄くし、断面形が柳葉形につくるものがある。柄頭付近に円孔をとどめるものがあり(71)、転用材である可能性もあるが、多くには転用材の痕跡はみられない。先縁には磨滅痕跡が顕著で、使用頻度の高いことを示す。

c 削りもの杓子(PL.71-74) 現在、身の過半をとどめるにすぎず、柄は折損してない。身の平面形は長楕円形を呈し、その基端に柄の付根がわずかにのこる。この器は一般の汁杓子と

くりもの
しゃくし

型式	番号	全長	身長	身幅	身厚	柄幅	柄厚	型式	番号	全長	身長	身幅	身厚	柄幅	柄厚
A	46	22.2	4.0	1.9	0.3	0.7	0.5	A ₁	57	22.4	—	—	0.6	(1.3)	0.5
	47	11.6	3.2	2.1	0.2	0.9	0.2		58	20.5	3.6	(3.2)	0.4	1.9	0.5
	48	(6.9)	1.9	1.7	0.4	0.4	0.4		59	20.5	5.0	3.5	0.8	2.0	1.0
	49	(5.7)	2.3	1.4	0.4	0.7	0.5		60	18.3	6.0	3.8	0.3	1.9	0.25
	50	(6.3)	2.3	1.4	0.2	0.6	0.3		A ₂	61	69.2	31.7	14.9	1.2	5.2
	51	13.9	4.5	1.4	0.3	0.8	0.3	62		50.7	27.0	8.3	0.7	5.1	0.8
B	52	15.7	4.7	3.6	0.3	0.8	0.5	63		(45.1)	20.1	9.1	1.2	4.4	1.4
	53	15.7	4.7	2.6	0.5	0.95	0.5	64		36.2	16.8	15.6	0.6	5.8	0.5
C	54	31.5	13.0	3.8	0.6	2.0	0.7	65		33.8	19.5	7.0	0.8	4.5	1.4
	55	22.8	7.7	2.3	0.6	0.95	0.6	B	66	(34.9)	15.0	4.2	0.6	2.4	0.65
	56	14.4	5.6	2.1	0.2	1.3	0.3		67	(33.0)	10.5	5.2	0.5	2.4	0.7
単位cm ()は残存値							68		28.3	10.4	6.4	0.4	3.9	0.6	
Tab. 13 匙形木製品の法量							69		(27.5)	(6.3)	7.3	1.0	2.6	0.9	
単位cm ()は残存値							70		26.9	10.0	(3.6)	0.5	2.1	0.4	
Tab. 14 杓子形木製品の法量							71		23.4	10.5	4.25	0.6	2.2	0.7	
単位cm ()は残存値							72		(19.7)	6.5	5.6	1.0	2.6	0.9	
単位cm ()は残存値							73		(13.5)	5.8	3.3	0.35	—	0.7	

となり、柄に移行する頸部付近を襟状に高くするほかは、身の中央部分を厚くし周縁に向って次第に薄くし、外縁の鋭利な鋤先のようにつくる。製作は丁寧で、全体に滑らかであることから、削りによる整形後トクサのようなもので磨研した。ようである。広葉樹材。身の長さ18.5cm, 復原幅12.8cm, 最大の厚さ1.1cm。

は し d 箸(75) ヒノキ材の木片を小割りにしたのち、棒状に整形したもの。細い丸棒に削るの *
 であるが、削りはきわめて粗雑で本と末の区別はない。出土例は多いが、いま完形のもの302本をえらび計測値を出してみた。いずれも直径は0.5cm内外で、最大の長さ24cmから最小の長さ14cmまでのばらつきがある。そのうち長さ17~22cmの箸が全体の80%を占める。なかでも、20~21cmの長さのものが最も多くこれが標準的な長さだったことがわかる。使用の痕跡は明瞭でなく、製作の粗雑さを考慮すると、一時に使用し、まとめて廃棄されたことが推される。 *

Vi 容 器 (PL. 69・70)

ふ た a 蓋形木板(76~81) 隅切方形もしくは円形の木板で、その形状から一種の蓋もしくは台としての用途がかんがえられる。6点出土。(76・77)は厚手の方形板材の四隅を切りおとしたもの。両面は鉋で整形し、2方の木口は面取りする。いずれもヒノキ板目材。76は長さ18.2cm, 幅14.5cm, 厚さ約1.6cm。77は長さ19.5cm, 幅19.0cm, 厚さ約1.0cm。78・79は厚手の円形の木板である。78は周縁に法をつけ、中央に方孔を穿つ。ヒノキ板目材。直径15.0cm, 厚さ0.9cm, 方孔の一辺約0.3cm。円板中央に穿孔する器は、他地区からも出土しており、蓋・台の用途のほか、容器の底にはめこんで甑として用いた可能性もある。79も78と同じ作りの器であるが、多少楕円形につくり、中央の方孔はない。ヒノキ板目材。直径14.3~13.5cm, 厚さ0.8cm。80・81はさきの2例に比して薄手の円形木板。一見曲物容器の底板にみえるが、いずれも周縁に法をつけたり周縁を薄くし、木釘孔痕跡がない。80はヒノキ板目材、直径20.5cm, 厚さ0.5cm, 81はヒノキ板目材、直径17.4cm, 厚さ0.7cm。

まげもの b 曲物容器(82~107) 薄板を曲げて側板とし、円板形の底板ないしは蓋板に木釘ないしは

10) 茨城県高萩市付近には、桶の底に孔をあけたダラクオケとよぶもので赤飯などを蒸すという『総合日本民俗語彙』第2巻(前掲) p.901。

型式	番号	直径	厚さ	木釘数
A	82	19.0	0.5	5 [6]個
	83	18.5	1.3	6
	84	18.0	0.5	3 [5] *
	85	[19.0]	0.4	—
B	86	17.3	0.7	7 [8]
	87	17.2	0.4	1 [?]
	88	17.2	0.6	—
	89	17.2	0.7	5
	90	17.0	0.7	5
	91	17.0	0.6	1 [?]
	92	16.9	0.6	— [?] *
	93	16.8	0.5	4
	94	16.7	0.8	4 [5]
	95	16.6	0.5	1 [?]
C	96	16.6	0.7	5
	97	[14.2]	0.3	1 [?]
	98	[14.0]	0.6	1 [?]
	99	[13.5]	0.3	2 [?] *
	100	12.1	0.5	4 [5]

直径・厚さ単位 cm [] は復原値

Tab. 15 曲物容器底板の法量

型式	資料番号	外径	内径	厚さ	綴穴数
A	101	[42.2]	[40.0]	[0.8]	2[8]個
B	102	[29.3]	[26.6]	0.75	5
C	103	[21.6]	[20.6]	0.7	3[6]
	104	[21.5]	[20.8]	0.8	3[6]
D	105	20.5	18.6	0.6	3[4]
	106	19.7	18.9	0.55	5 *
	107	18.7	17.2	0.5	4

外径・厚さ単位 cm [] は復原値

Tab. 16 曲物容器蓋板の法量

樺皮で固定した円形の容器。今回の調査では完形品は少なく、多くは底・蓋・側板に分解している。いずれもヒノキ材。

底板は正円につくり、柾目の板材を用いる。両面を鉋で整え、周縁を鋭利な刃物で正円形に削る。周縁の整形に際して、側面を垂直に削るものといくぶん法をつけるものがある。周縁の側面には側板を固定した木釘孔があり、木釘をとどめる例もある。釘孔の数は一定せず、もっとも多いもので7孔(復原では8孔になる)、もっとも少ないものでは4孔である。釘孔の間隔は一定せず、むしろ側板の固定を弱くする木口の木理方向をさけて穿孔している。

底板の直径から、A・B・Cの3型式に区分できる。すなわち、A型式は直径18.0~19.0cm、B型式は直径16.6~17.3cm、C型式は直径12.0~14.2cmである。このうち底A・B型式は後述する蓋板のなかに対応するものを見出すことができ、蓋つきの容器であるといえよう。C型式に対応する蓋板はなく、蓋を必要としない器で杓子などの器になる可能性がよい。

蓋板は板目の板材を用いる。両面は鉋^{やりがんな}で整え、木表を上面とし周縁を鋭利刃物で正円形に削る。なかには、上面をやや甲高にし、周縁を薄くするものがある。蓋板の下面縁端から1cmほど中央よりの円周上に側板をおき、側板と蓋板とをとじあわせる。側板の位置は、蓋板下面周縁にのこる側板の押圧痕と、それに添ってのこるとじ孔によってわかる。とじ孔は2孔を一对とし、円周上に4~6対を配するが、その間隔は一定しない。ただ、木理方向に一对穿孔する場合は、つねに木理に斜交する。下面のとじ孔に添って針描きの円弧がみとめられることから、あらかじめコンパスで、側板位置を決めたことがわかる。106は蓋のほぼ完形に近い例である。側板は幅1.5cm、厚さ0.4cmの薄い柾目板で、身の側板にみるような木理に直交する刻線とその内面にいれない。側板の両端を重ねて樺皮でとじあわせるが、とじあわせは両端部分の2個所でおこなう。すなわち、側板の末端が内側にみえる個所では縦に2孔をあけ樺皮をとおしてとじ、末端が外側にみえる個所では外側の末端を幅約0.3cmせばめ縦に2孔をあけ樺皮をとおしてとじる。蓋板と側板は、蓋板の周縁にあけた5対の縦孔とそれに対応する側板の5孔とを樺皮をとおして固定する。

蓋板は底板にくらべてすくないが、内径(とじ孔位置での直径)によってA・B・C・Dの4型式に区分できる。A型式は内径40cm、B型式は内径26.6cm、C型式は内径20.6~20.8cm、D型式は内径17.2~18.9cmの数値でわかる。蓋板のなかには底板と対応するものがある。すなわち、蓋板C・D型式は底板のA・B型式に対応する。蓋板Bに見合う底板は今回発見しなかったが、宮内の他の遺構から直径23cm前後の底板が少なからず発見されている。ただ蓋板A型式に見合う底板が現在まで発見されていない。

曲物の底板・蓋板の個々の法量は表示したとおりである(Tab. 16・17)。

側板は断片となって残存する。それらのうち、身と蓋とに識別できるものを取りあげたい。

身の側板はさきへのべたことがあるように、まづ幅広の薄板(側板a)の両端をとじ円筒形をつくる。この円筒に底板をはめ、底板に接する部分に幅の狭い薄板(側板b)をタガ状にまわしその上から木釘を打込んで底板と側板を固定する。身側板aとしては高さ8.4cmと6.9cmの2種類を確認している。それらは厚さ0.2~0.4cmの柾目の薄板で、内面には木理に直交ないしは斜交する刻目(0.2~0.4cmの間隔)があり、一部には両端をとじあわせる縦穴、底板を固定した木釘穴がのこる。身側板bとしては、幅3.1cmと2.5cmの2種類を確認している。とも

まげもの
底板

まげもの
蓋板

まげもの
側板

に厚さ0.2~0.5cmの板目材の薄板で、木釘孔の有無は不明であるが綴孔は部分的にのこる。1例として直径18cm前後に復原できるものがある。蓋の側板としては、106以外に1例確認しているにすぎない。幅3.5cm・厚さ0.4cmの柁目薄板である。

以上のように曲物容器の直径には、一定の規格を見出せる。また、多くの曲物容器の直径が20cm内外におさまることは、底板に用いる柁目板の木取り限界にもとづくのであろう。*

おしき c 折敷(108~113) 扁平な底板に薄い側板をとじつけた折敷。いずれも断片で完形品はない。しかし、さきに報告した6 ABO区 SE311¹¹⁾の出土例によって全形がわかる。

おしきの 底板(108)は二次的に切断されている。直線の木口面にわずかに法をつけており、もとの仕口をとどめている。このことから、元来は方形の板であったことがうかがわれる。旧木口から内寄りの位置に斜行する2孔をあける。またこの位置には、旧木口面に平行する帯状の押圧痕跡*があり、側板の位置を示している。現存の長さ6.7cm、厚さ0.8cm、側板押圧痕跡の幅0.5cm。なお、同一個体の破片とおもわれる109には、旧木口面から内よりのところに4個の角孔を刃先で穿つが、これは2次的な加工である。

110は楕円形の板である。現在2片のこるが、板目材からつくる同一個体の破片である。周縁を楕円形にかたどり、縁端には内面から法をつける。2片には、それぞれ側板をとりつける*とじ孔を一对あけ、とじ孔には榫皮をとどめる。現存の長さ13cmと10cm、現存の幅3.8cmと2.7cm、厚さ0.8cm。後述するように確実にこの種の底板にともなう側板を検出していない現状から、比較的側板の低い折敷ふうの器であるか、側板の高い桶状の器であるかただちに断定することはできない。宮内の他の遺構から検出した同種の底板には、側板位置に断面がV状の溝をめぐらしているものがあり、同じ作りのものが藤原宮跡でも出土していることから、側板*位置にV状の溝をつけるものが形式的には古いことが推定できる。¹²⁾

おしきの 折敷の側板と考えられるものには、高さ約5cm以上の高いものと、高さ3cm以下の低いものとがある。いずれも108のような方形ないしは長方形の底板にとりつけるものである。

111は側板の高いほうの例である。現在、木理方向で3片に割れ、それぞれは互に接着しないが、木理の状況などからして同一品とみられる。薄板の両端内側に折り曲げるための刻目を縦*・斜の方向にいれ、ほぼ側板一辺の長さをとどめている。ヒノキ板目材。現存の長さ51.5cm、物差し 幅6cm以上、厚さ0.5cm前後。この遺物は二次的に物差しとして転用され、一面には文字を、他面には目盛りを墨書する。目盛りは、木理に直交する太さ0.1cm前後の墨罫である。罫と罫との間隔はおよそ4.4cmで、のこりのよい破片では10区画をとどめる。一目盛りの長さを厳密に測ると、4.65~4.3cmまでのばらつきがあり、1寸5分目盛りのようである。この種の側板*としては、柁目の薄板からつくる高さ5.4cm、厚さ0.5cm前後の側板がある。112・113は側板の低いほうの例である。いずれも高さ3cm前後、厚さ0.5cm内外の薄板である。2例とも2

11) 『平城宮報告Ⅳ』p. 35, PL. 51

12) その初現的なものは、静岡県田方郡菰山町山木の弥生時代遺跡から出土している(後藤守一『伊豆 山木遺跡—弥生時代木製品の研究—』築地書館 1962年 pp. 60)。木下忠は、これを弥生時代の曲げ物だけの底板とするが、蓋もしくは折敷ふうの器であろう。小林行雄は、弥生

時代の曲げ物存在説に反対している(『続古代の技術』塙選書44 塙書房 1964年 pp. 31)。古墳時代の埴製盒や石製盒には、楕円形曲物の存在を予測させるものがある。藤原宮跡例(残長59cm)も、側板を失っており、折敷ふうの器であるか、桶状の器であるかいずれとも決めがたい。『藤原宮』p. 67, PL. 16-27, PL. 51

次的な切断をうけ、短冊形を呈する。112は側板の両端を重ねる部分の破片である。重ねあわせ部分は端部に向けて薄く削り、端部部分の2個所を樺皮でとじあわす。一方の側面と一面との稜線に浅いV字形のえぐりをいれ、その中央に底板にとりつけるための孔をあける。この例

- も2次的に木簡に転用され、一面に「西宮宛宛□」の習書がある。113も同様の例であるが、
* この例では薄板の中央に錐で直径0.3cm内外の3孔を縦に配する。3孔は側板の両端を重ねあわすための綴孔であろう。綴孔から少しはなれた一側面からV字形の浅いえぐりをいれ、その中央に穿孔する。底板をとりつけるための綴孔である。

d 箱(114・115) 完形品はないが、小箱の蓋もしくは底板と考えられる破片がある。

- 114は板目の長方形板材。全面を削って整形し、4隅に釘孔をあける。木口に接する2個の釘孔にはなお木釘をとどめる。これに対応する2個の釘孔は他端木口から少し内よりに位置する。これらの釘孔はいずれも側板を固定するものであろうが、この状況では側板を方形にめぐらすことはできないので、少なくとも木口面が2次的に切断されている可能性が大きい。なお、この板の上面には、木口に平行して2本の墨描き線をいれている。長さ17.1cm、幅8.2cm、厚さ0.7cm、木釘の径約0.3cm、2墨描き線の間隔14.5cm。115は柾目の板片である。一端の木口面と一側面は欠損している。鉤の手の縁にそって木釘孔がある。木釘孔の状況からすると数度の補修をうけている。いずれも側板を固定するための孔であろう。現存の長さ7.2cm、現存の幅6.6cm。

e 盤(116) 板目の広葉樹材からつくる挽き物の円形盤。腐蝕が進行し崩壊する部分も多いが、両面ともクロロビキである。縁は底の内面からわずかに外開きにつくり、内面中央に低い円圏をつくる。この円圏の直径は盤の半径にひとしい。底の外面には縁にそって低い高台をつくる。椀などの承盤である。直径22.8cm、高さ1.6cm。

f 漆蓋(117) 縦木取りの漆塗の蓋、広葉樹材。挽き物の木心に麻布を貼り、その上に黒漆をかける。器の下面は平滑にするが、上面は幾分甲高に仕上げる。現在全体の約1/5をとどめる。元来は宝珠形のつまみがつくかもしれない。復原直径約8.8cm、厚さ0.3~0.4cm。

* VII 部 材 (PL. 72)

木製品のなかには、部材としては完結していながら、それによって構成される本来の器を推測しえないものが数多く存在している。ここでは、それらの部材を形態的に区分する。

a 柄穴のある角材(118~120) 角材の一端あるいは両端に柄穴をあける材。類品の代表的なもの3例をあげよう。

- * 118は角材の全面を丁寧に削り、一方の側面中央から一端木口にかけて浅目に削って幅を狭くする。両端木口から内よりの位置で表裏に貫通する方形の柄穴2個を鑿で穿つ。長さ38.7cm、最大幅4.7cm、厚さ1.9cm、柄穴径2.6cm前後、2柄穴間の心心の長さ26.7cm。119は扁平な角材の一端に貫通する長方形の柄穴をあけている。一端は折損のため不明である。現存の長さ19.7cm、幅3.2cm、厚さ1.0cm。柄穴の長径1.3cm、短径1.1cm。120は扁平な角材で一端は焼失している。腐蝕がかなり進行してはいるが、本来は全面が丁寧に削られていたことがわかる。柄穴を残存する一端に方形にあけている。現存の長さ25.2cm、幅6.1cm、厚さ2.4cm、柄穴径3.4cm。

きりかき部材

b 切り欠きのある部材(121~124) 材の一方の面に渡りあご風の切り欠きをいれるもの。

121は現在一端を折損する厚手の板材。材の一方の面に切り欠きをいれ、その中央に長方形の柄穴をあける。いずれも鑿による加工。復原長15cm 前後、幅 6.3cm、厚さ 3.0cm、切り欠きの幅 9.5cm 前後、深さ 1.5cm、柄穴長辺 5.0cm、短辺 3.8cm。122は断面が台形の角材。全面を丁寧削って整形し、両端木口の四稜にも面取りをおこなう。角材の一面に鑿で切り欠き * をいれ、切り欠き面の両端にそれぞれ 1 個の円孔を穿つ。円孔は錐で表裏に貫通させるが、2 孔は直線に揃わず左右に少しずれる。現状では第 2 の材を切り欠きにかみあわせたり、円孔に挿入した痕跡を見出すことはできない。長さ 19.1cm、幅 4.1~4.5cm、厚さ 2.8~3.0cm、切り欠きの幅 13.1cm、深さ 1.4~1.2cm、円孔の直径 0.9cm、2 孔間の心心の長さ 8.5cm。123 は裏面に切り欠きをいれ、表面を舟底風に削り、両端木余り部分に表面から木釘を打込んで第 * 3 の材に接合する部材。すなわち、両端木口に向けて表面と両側の三方から削って表面を舟底風にととのえる。裏面には長手の切り欠きをいれ、両端の木余り部分の表面を平坦にする。切り欠きの内面には、現在木理に直交する 3 本の釘描き刻線をとどめる。表面の両端から錐で穿孔し、一孔には木釘をのこす。なお、現状では埋没時の土圧でかなり変形している。長さ 17.0 cm、最大幅 2.8cm、最大の厚さ 1.2cm。切り欠きの幅 12.6cm、深さ 0.3~0.8cm。釘孔の心 * 心の長さ 14.1cm。

124は断面半円形の棒状材。表面を丸く仕上げ、裏面はおおむね平坦。両端木口に接して裏面から浅い切り欠きを入れる。一端は折損し切り欠きの一部分しかとどめないが、他端には完全に切り欠きをとどめる。現存の長さ 25.6cm、幅 2.0cm、厚さ 1.5cm。切り欠きの幅 2.1cm、深さ 0.2cm、切り欠き間の心心の長さ約 23cm。124に組み合うらしい部材として 125・126があ * る。この 2 点は同形・同巧のつくりで柱目の小板片を支脚形に加工したもの、上半と下半にわかれる。上半分は第 2 の材へのとりつけ部分で、上端を山形にそぎ両側をまっすぐとおす。下半分は両側からえぐりをいれ勾形の支脚状につくる。長さ 5.9cm、最大幅 2.1cm、厚さ 0.8 cm。この上半分の幅と(124)の切り欠きの幅がよく合致するのである。

127は長方形の板材に溝を刻んだもので、上述の切り欠きとはことなる。板材の一面の上下 * 2 個所に、木理を横断する V 字形の溝をきりこんだものである。長さ 18.0cm、幅 2.9cm、厚さ 0.5cm。刻り溝の幅 1.0cm 前後、切り欠き間の長さ 9.6cm。

128は柱目の板材を加工したもの。上面の中央部分を高くのこし木口方向に次第に低く削り、下面は平滑に削り側面形は山形になる。高い部分のわずかに一端に片寄り位置に切り欠きをいれ、両端に上面から穿孔する。孔に木釘がのこるので、第 3 の材に固定したようである。長さ * 7.8cm、高さ 1.2cm、幅 0.9cm。切り欠きの幅 1.0cm、深さ 1.0cm。

ほぞ部材

c 柄のある部材(129~132) 材の両端に柄をつくりだすものと、二個の部材とを結合する 履い柄がある。

129は柱目の扁平角材の両端に柄をつくり、中央部分の一側面から半円形のくりかたをいれ * る。両端の柄は表裏と一側面の三方から鑿で加工したもので、柄の中央には表裏に貫通する円孔を錐で穿つ。桶の把手のような部材かもしれない。材は著しく腐蝕している。長さ約 28.0 cm、幅約 3.4cm、厚さ約 2.3cm。柄の長さ約 3.0cm、幅約 2.8cm、厚さ 1.0cm。円孔の直径約 0.7cm。130 は柱目の扁平角材の両端に柄風の加工をほどこした材。両端を両側面から斜めに

削って幾分身幅を狭くするにとどまり、身と柄との間に明瞭な境はない。長さ27.9cm, 幅3.3cm, 厚1.3cm。柄の長さ約4.5cm, 最小の幅2.5cm。

131・132は別の部材に埋木して用いる雇い柄である。131は長方形の木札の上半を削って柄をつくり、埋木する下半には粗い割り面をのこす。長さ7.7cm, 幅4.1cm, 厚さ2.4cm。柄の
* 長さ1.5cm, 幅3.4cm, 厚さ1.3cm。132は木札の上下を2分する位置に刻線をいれ、上半を柄とし下半を埋木する。すなわち、刻線から上部は各稜に面取りをほどこし入念に削る。これに対して下半の削りは粗い。長さ7.8cm, 幅4.9cm, 厚さ1.9cm。雇い柄は現在までの発掘調査では、井戸枠の繋ぎ材に用いている例が多く知られている。上述の諸例もそうした用途に供するものである。

* d 丸 棒(133・134) 角材を削って丸棒にしたもの。それらは、小断片に切断されたり、まるぼう縦割りの半截丸棒としてのこり、完形をとどめるものはないが、いずれも節をさけた良質のヒノキ材。いまは、それらのなかでやや原形に近い2例をえらぶ。

133は一端を2次的に切断した丸棒。旧木口面は入念に削り、棒の表面にはかなり長い割りあとがのこる。断面は楕円形に近い。旧木口面から内よりに一孔の角孔が貫通している。角孔
* は棒の長径の中央から穿ち、孔が方形であること、上から下に向けて孔が次第に細くなっていることから、本来は釘づけされていたことがうかがわれる。格子のようなものだろうか。現存の長さ48.2cm, 長径3.0cm, 短径2.4cm, 角孔の最大幅0.5cm。

134も133と同じ作りの長い丸棒であるが、多少異なる。すなわち、丸棒の一端に磨滅した旧木口面をとどめるが、対応する他端は幾分幅をひろげ杓子状につくる。この部分は損傷をうけ
* 原形をしりえないが、現状での形は「孫の手」を大型にしたようなものである。現存の長さ77.8cm, 丸棒部分の径2.7cm, 先端突起の幅3.6cm, 厚さ2.1cm。

e その他の部材(135~144) 135~140はくさび形の部材。長方形の粗い割り面をとどめる く さ び材の一端を両面から削って、斧頭状に加工する。長短大小の差はあるが、いずれも局所的な加工にとどまる。刃にあたる部分や頭頂部分には顕著な使用痕跡はみとめられない。法隆寺金堂
* の柱には、くさびを打込んだものがあること¹³⁾から、これらも木材を割る際に用いた可能性がよい。ヒノキ材。個々の法量は Tab. 17 のとおりである。

141・142は杭の例である。杭は広葉樹の自然木の先端を尖らしたものが多く、大小さまざま く いのものが出土している。しかし、多くは原形をとどめていない。141は数少ない完形品の1例であって小型である。樹皮をとどめる枝木を用いており、先端を鉛筆状に削っている。長さ
* 27.1cm, 直径約2.2cm。142も同じ作りのものであるが、先端の削り部分には切込みをめぐらしている。上部は折損している。現在の長さ16.8cm, 直径約2.8cm。

資料番号	長さ	最大幅	最大厚	143は細板を木釘でつないだ例である。板のいた・くぎ
135	11.5	4.3	1.3	両側面に4本と3本の木釘を間隔不定で埋めこんだものである。長さ20.4cm, 幅1.0cm, 厚さ0.6cm。
136	11.7	1.9	1.5	
137	10.6	3.0	2.3	
138	19.9	5.0	2.0	
139	19.0	4.2	1.2	
140	12.6	5.2	1.5	144は割り裂きをのこす板目の板2枚を横に

単位 cm

Tab. 17 くさび形木製品の法量

13) 法隆寺国宝保存委員会『法隆寺国宝保存工事報告 国宝法隆寺金堂修理工事報告』1956年。

連続するもの。一木口と側面に原形をとどめ、他は2次的な加工をおこなう。原形をのこす木口面は外彎する弧形縁に削り、側面の縁も部分的に弧状に削る。周縁には3孔を穿つが、それらはいずれも錐を用いず刃先で穿ったものである。側縁の2孔は一对となり、木口縁の1孔も本来は一对となって機能するのである。おそらく、板に棒状の材をあて穿孔部分で、紐などを用いて固定するのであろう。最大の長さ47.5cm、現存の幅16.4cm、厚さ0.5cm前後。*

Ⅲ 用途不明木製品 (PL. 73)

木製品としては完全な形態をとるが、現段階では用途を推測しえないものがある。

ふだ a 札形木製品(145~147) 板目の木片を札形に加工したもの。3点出土。145・146は両面を平滑に削り、2側面に接する四稜を面取りして断面を楕円形に近い形にする。両端木口は両側面から斜にそぎ、3角形にする。この場合一側面からの削りが深く、全幅の約3/4に達し、他側面からの削りは先端をそぐ程度で、平面形はむしろ台形に近い。145は長さ10.0cm、幅2.8cm、厚さ1.1cm。14.6は長さ9.7cm、幅2.7cm、厚さ1.0cm。147は両端の形が少しことなる。すなわち木口の両側面からの削りおこしと長さがほぼ等しく、両端は剣先状になる。他の部分は前の2例と同じである。長さ8.9cm、幅1.9cm、厚さ0.7cm。*

せんこう板 b 穿孔板(148~151) 小木片に表裏を貫通する数個の穿孔をおこなったもの。4点出土。*

148は平面形が細長い楕円形の小板に縦列の穿孔をおこなうもの。小板片を両面から両側縁にかけて薄く削り、両端を半円形にする。また材の中央には、錐をもちいてたてに5孔穿っている。長さ6.7cm、幅1.6cm、最大の厚さ0.4cm。孔の径約0.1cm。

149・150も小木板に縦列の孔を穿つものであるが、148とはことなる。149は断面が中高のカマボコ形で、両端木口は直截面。その中央で木理方向に4孔をあける。穿孔は焼火箸のようなもので両面からおこない、孔の内面は焦げている。現在、孔にそって縦に割れ半分を欠失。長さ4.1cm、現存の幅0.8cm、厚さ0.4cmの孔の直径約0.4cm。150も149と同じつくりで、中央に5孔を縦列にし、現在縦半分を欠失。長さ5.7cm、現存の幅0.9cm、最大の厚さ0.3cm。*

穿孔木板のうち、149・150は焼火箸のようなもので穿孔するので、一見、火鑽臼のような形態をとる。しかし孔の位置をあらかじめ刃物で窪ませていないこと、孔が側面にそって穿孔されていないことから火鑽臼とはいえない。

151は楕円形に近い木板に、鼻緒孔のような配置で孔を穿つもの。板材の両端木口を直線にし、両側縁を外反りに削って平面形を小判形にととのえる。板は幾分一方に反り気味で、中央部分を厚く側縁を薄くする。一方の木口縁の中央に1孔を穿ち、両側縁の中央にそれぞれ縦方向に揃えて2孔一对を穿つ。穿孔は錐とおもわれるが、紐ずれの痕跡はない。ヒノキ柾目板。下駄の形代であろうか。長さ12.9cm、幅6.3cm、最大の厚さ1.0cm。*

えんばん c 小円板(152~155) 板材を円形に加工したもの。周縁の一部に突起をつくるもの、円板の中央に孔を穿つもの、孔を穿たないものがある。4点出土。

152は柾目の小円板に、棒状の突起をつくり、円板の中央に円孔を穿つ。直径3.5cm前後、厚さ0.4cm。突起の長さ0.9cm、幅0.6cm。円孔直径約0.6cm。153は柾目の板材からつくる小円板。正円でなく、若干、楕円形に近い。長径4.0cm、短径3.9cm、厚さ0.4cm。*

「□五斤」 154も柾目の板材からつくる小円板。転用材を用い、整形する一面には「□五斤」の墨書が

ある。他面には製材時の割り面がのこる。円板の周縁には法をつけ、断面は扁平な台形に近い。直径5.4cm、厚さ1.1cm。

155は上述の諸例と異なるが、便宜的にこの項をいれる。広葉樹の小木片をもちいる。平面形を楕円につくり、その側周に刻線をいれ一周させ上面を浅く窪ませた大豆状の加工品。長径

* 1.8cm、短径1.3cm、最大の厚さ0.8cm。

d えぐりのある木製品(156~158) 156は細板材を左右対称形に加工したもの。板材の両側縁にそれぞれ3個のV字形くりかたをいれる。上端は円頭形につくり、以下のくりかたも角をおとし、上部は小円板を3個連結した形状になる。下部は両側縁をそぎおとし、剣先状にする。ヒノキ柾目板材。長さ22.6cm、最大幅3.7cm、最小幅1.3cm、厚さ0.5cm。宮内の他地

* 区から発見した「削り掛け」のなかには、これと類似するものがある。156も「削り掛け」の一部にくわわる可能性があるが、その形態は特異である。

削り掛け
の一種か

157も板材を左右対称形に加工したもの。両端木口を木葉形にかたどり、両側縁におのおの2個のV字形くりかたをいれ、中央部分を鋸歯形の対象形にする。上面中央に縦方向の鑄をとおし、上下のくりかた付近の鑄上から2個の円孔をあける。円孔は錐をもちいず、両面から鋭利な刃先でくりぬいたもの。現状では木理に添って縦方向に2折し、一半の一部を2次的に削りとる。ヒノキ板目材。長さ12.0cm、最大幅3.1cm、最小幅1.2cm、最大の厚さ0.7cm。用途は決めがたいが、祭祀具にふくめられるかもしれない。

158は長方形の板材を加工したもの。下端は両面から刃物をいれて直線に切りおとす。上端は斜めに切りおとし、その下部の側面からV字形のくりかたをいれ嘴状を呈する。くりかたをいれる側面は直線にするが、他側面は、幾分か内彎気味に浅く削りこんでいる。ヒノキ柾目材。長さ12.2cm、幅1.1cm、厚さ0.8cm。鳥か馬の形をあらわした類似品が他の遺跡から発見されており、本例も鳥形ないしは馬形である可能性が大きい。

形代か

e 柄状木製品(159) 角棒の小片を加工したもの。棒材の上半は断面菱形にととのえ、下半分は粗削りのままの状態。上端に細めの舌状の突出をつくり、この突出部分に2条の刻線をめぐらす。下端の切断は粗く、一面から切りこみをいれ、のこりを手で折り欠く、舌状の突出部分になにものかを装着したのであろうが、現在装着の痕跡をとどめない。長さ11.8cm、幅1.0cm、厚さ0.7cm。舌状突出部分の長さ0.5cm、幅0.5cm。

f 十字形木製品(160) 板材から十字形の木器を加工したもの。材は柾目の板材で、材理に斜交する木どりで、十字形に4枚を削りだす。各枝は断面6~8辺の多面形につくり、各枝の先端は直断面を呈する。長さ9.2cm、幅9.1cm、厚さ0.6cm。一枝の幅1.0cm前後。

十字形
木製品

g 骰子形木製品(161) 粗割り面をとどめる柱状の小角材を加工したもの。断面を正方形とし、両端は角錐形にする。長方形の4面には、木理を横断する刻線をいれる。刻線は合計12本あり、1本と3本、2本と6本とをそれぞれ相対する面に配る。一種の骰子であろうか。この種の木器は他地区からも出土しているが、それらはいずれも1本と3本、2本と4本の刻線を相対する面に配っており、この例とはことなっている。長さ5.3cm、幅0.95cm、厚さ0.85cm、

さいころ形

h 柱状木製品(162・163) 162は角材を加工したもの。材は断面正方形に近い柱状角材で、両端木口は直断面。側面の四稜中央部には内彎する浅い弧状のえぐりをいれる。長さ14.3cm、幅5.6cm、厚さ4.7cm。163は扁平な角材加工品。断面長方形に近い角材で、側面と両面が接

する各稜を面取りする。上端木口は山形に削り、下端木口は鋸で切断して直截面にする。一面では下端から上端にかけて薄く削って厚さを減じている。山形の木口の各稜に磨滅痕跡がある。長さ11.2cm, 幅4.7cm, 厚さ2.3cm。

く し 形 i 串形木製品(164~169) 棒状割材の先端を尖らしたものを、先端を扁平にして筧状につくもの両者がある。ここでは身の断面形が、A長方形、B円形、C半円形を呈するものに区分し代表例をあげよう。なおいずれの木器にも先端に磨滅痕跡をとどめる。

型 式	資料番号	長 さ	最大幅
A	164	27.8	1.6
	165	28.2	0.9
	166	24.4	1.4
B	167	23.6	1.4
C	168	25.5	1.4
	169	(20.0)	1.6

単位()は復原残存値

Tab. 18 串形木製品の法量

A型式(164~166) 細板材を加工したもの。いずれも上端は切りおとしであるが、164・165は下端を針先状に鋭く尖らし、166は扁平な剣先状につくる。B型式(167)は丸棒からつくる。上端を直截面とし、下端は次第に細く尖らし、円錐状を呈する。C型式(168・169)は断面半円形の棒材からつくる。168は上端を切りおとしているが、169は上部焼失のため不明。下端はいずれも167と同じく円錐形に尖らす。

C SK2101 他出土木製品 (PL. 74. 77)

ここで、中区東半部東端近く(6AAO区D地区)の土壙SK 870, 同区東半部中ほど(6AAO区G地区)のSK2101・SK2102・SK2104, 中区東半部(G地区)の井戸SE2128, 同区西半部東端近く(6AAO区M地区)のSE2278から出土した木製品を一括してあつかうことにしよう。表題にもえらんだように、これらのうちSK2101の出土品が最も多い。なお、SK870においては平城宮Vの土器、SK2101においては平城宮IIIの土器、SK2102においては平城宮IIの土器、SK2128においては平城宮Vの土器を件出しており、それぞれの木製品の略年代を想定できる。

i 服 飾 具 (PL. 74)

げ た a 下 駄(170) 平面形が隅丸長方形の下駄。板目の材からつくり、木表を台の上面にし、周縁には面取をほどこす。歯は連歯で台を鑿でくりぬいてつくる。台上には3孔の鼻緒孔を錐であけ、前壺は右にかたよる。足裏の指やかかとのあたる部分が磨滅し、鼻緒ずれが顕著で、後歯の右よりから台の下面後端が著しく磨滅していることなど、よく使用されている。長さ22.1cm, 幅9.6cm, 最大の高さ3.0cm, 台の厚さ1.3cm。SE2278出土。

ii 祭 祀 具 (PL. 74)

かたながた a 刀 形(171) 細板材からつくる。全長の約半分を刀身とし、のこりを柄にする。刀身には刃と鑄と刃先をつくる。柄は四稜を粗く面取りする程度。ヒノキ板目材。長さ22.4cm, 最大幅1.9cm, 最大の厚さ0.8cm。SK2101出土。

けずりかけ b 削り掛け(172~175) 172・173は短冊形薄板の下端を尖らし、上端を圭頭状にかたどり、圭頭の両側縁に削り掛けをいれたもの。172は板目材、下半欠失。現存の長さ18.0cm, 幅2.5cm, 厚さ0.2cm。SE2278出土。173は粗割り面を表裏にとどめる板目材。長さ14.0cm, 幅2.1cm, 厚さ0.2cm。SK870出土。

174 は、やはり表裏に割り面をとどめる細板材をもちいる。現状では頭部を折損するが、下端は両側から鋭く削って尖らす。現長16.6cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm前後。SK2101出土。

175 は上述例とことなり、割棒材からつくる。断面3角形の棒材で、先端を尖らす。身側の一稜には、V字形のえぐりをほぼ等間隔に4個配する。棒材3面のうち2面には割り面をのこすので、2次的加工をうけている可能性もある。長さ15.2cm、最大幅0.8cm。SK2101出土。

176 は削り掛けと形状をことにし、用途もことなるとおもわれるが、一応この項にまとめておく。上部を細板の状態でのこし、下部を留針のように細くする。上端は折損のため不明。長さ15.5cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm。ヒノキ板目材。SK870出土。

iii 工 具 (PL. 74・77)

* a 木 針(177) 柱目の細板材からつくる。頭部は直線に切りおとし、先端は両側面から削り削って尖らす。頭部に針孔をあけるが、それは刃物の先でくりぬいたものである。SK820出土の木針と基本的には同じであるが、本例のほうが幅広である。長さ9.4cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、針孔長径約1.5cm、短径約0.7cm。SK2101出土。

* b 火鑽臼(178) 材の両端は折損。細長の角棒を用い、一側面は割り面をとどめるが他側面では上面に接する稜を面取する。白孔は面取りのある側縁に8個、他側縁に1個ある。白孔は摺鉢形を呈し、内面は焦げ、白孔にそう側面には刻み目をいれる。板目材。現存の長さ19.1cm、幅2.1cm、厚さ1.0cm。孔の直径約1.1cm、深さ0.7cm前後。SK2101出土。

* c 鳶口形木製品(179・180) 棒の端に尖頭の木片を鉤形に蔓で結びつけたもの。工具とする積極的理由はないが、一応この項にまとめておく。

* 179 は表面に樹皮をとどめる長手の自然木を柄とする。身は自然木的一端を杭状に削る。柄は自然木の本の方を柄元とし、末の方を柄尻とするが、身は柄元で柄尻の方向に約45度傾け蔓で縛って固定する。柄の長さ106.2cm、直径3.1cm前後。身の長さ20.7cm、直径3.0cm前後。SK2104出土。180 も表面に樹皮をとどめる長手の自然木を柄とする。柄は本の方を柄元とし、末の方を柄尻とする。柄尻は折損のため不明であるが、柄元は斜めに大きくそいで槍先状に尖らしさらに木口から裂け目をいれる。この裂け目に自然木を縦に4分割りした尖頭の木片を柄に対して直角に狭みこみ、蔓を巻きつけて固定する。柄部の現存の長さ92.8cm、直径0.3cm前後。身の長さ7.2cm、長径2.3cm、短径1.5cm。SK2104出土。

iv 食 膳 器 (PL. 74)

* a 匙形木製品(181) 身先縁を直線にするA型式の匙形木器である。仕上げは良好で、縁を鑿先状につくる。ヒノキ板目材。長さ19.0cm、身の幅2.2cm、厚さ0.4cm。柄の幅0.7cm前後、厚さ0.5cm。SK870出土。

* b 杓子形木製品(182) 身先縁を半円形につくるB型式の杓子である。柄を折損し、身部のみ。頭部から身の一面を削り先縁に向けて次第に薄くつくる。ヒノキ柱目材。現存の長さ16.5cm、身の幅4.9cm、厚さ0.5cm前後。柄の幅2.0cm前後、厚さ0.8cm。SK2101出土。

* c 箸(183) 折損した箸がSK2101から多数出土している。原形をとどめるものは少ないが、いずれもヒノキの割り材を削るもので、SK820の場合と同じである。

V 容 器 (PL. 74)

- ふ た a 蓋形木板(184・185) 円形の木板で2点ある。184は現在腐蝕が進行しており、詳細不明であるが、板目材からつくり、木裏面の周縁に法をつける。直径11.0cm 前後、厚さ0.7cm 前後。SK2101 出土。185 は全体の約1/3を欠失。板目材をもちい、周縁の削りは粗く正円にならない。直径21.0cm 前後、厚さ0.7cm。SE2128出土。*
- まげもの b 曲物容器(186・187) 側板は細片をとどめるのみである。底板と蓋板が各1枚ある。底板(186)はヒノキ柾目材からつくるB型式の底板である。腐蝕のため木釘穴の有無はわからない。直径17.0cm、厚さ0.6cm。SE2128出土。蓋板(187)はヒノキ柾目材からつくっている。損傷と腐蝕のため著しく原形をそこなうが、周縁の2箇所にとじ孔と樺皮をとどめる。下面には側板の押圧痕跡と針描きの円弧とがのこっている。平面形は正円ではなく小判形になっており、SK820の曲物容器蓋板には類例をみないものである。諸例のうちのないものである。復原長径16.5cm、復原短径11.5cm、厚さ0.5cm。SK2101出土。*
- ふ ね c 槽(188) ヒノキの割り材をくりぬいた槽。材は板目の角材で、横木にとり木表を上面にする。両端木口は手斧で粗く削り、両側面を平滑にととのえる。下面の四稜はともに面取りするが、両端の木口の下部は内方にむけて斜めに削り、下面は船底形を呈する。平面形が平行四辺形のくりぬきを上面からいれてくぼます。内面の四壁は法をとるが、とくに木口面の法は長く鑿の刃痕をとどめる。器壁の4隅には鑿で4孔を穿つ。3孔は外側面から内面の3隅に貫通、1孔は上面の一端から外側面に貫通する。孔の内面には粗く齟齬する鑿の刃痕をのこす。器の内面には磨耗痕跡があり、かなり使用されていることがわかる。最大の長さ62.8cm、幅21.1cm、高さ10.0cm。SK2102出土。*

Vi 部 材 (PL. 74)

- a 柄穴のある角材(189) 柄穴をとどめる材は数点あるが、いずれも破損・腐蝕が著しい。189は比較的よく旧状をとどめるもので、心持ちの角材に表裏に貫通する柄穴をあけている。現在、柄穴の部分から2次的な切断をうけており、これに対応する木口も鑿で削りとられている。現存の長さ約13.0cm、幅5.4cm、厚さ3.0cm。柄穴の幅2.5cm前後。SK2102 出土。*
- ほぞもち部材 b 柄のある部材(190・191・193) 190は扁平な角材の一端に柄をつくりだしたものである。柄のあけ方はよくわかり材の表裏からまず鋸で切り目をいれ、木口から鑿で打欠いている。柄をつくらぬ木口面は鋸で切断して平滑にしている。長さ28.9cm、幅4.1cm、厚さ2.3cm。柄の長さ1.9cm、厚さ0.9cm。SK2101出土。
- 191は細長の板材からつくる。2次的な加工をうけているらしく両側面は割り面を呈している。現状では細長の板材のようにみえるが、両側面にのこる削りの状況から長方形の材の両端に柄をつくっていたことがわかる。それぞれの柄の中央には、鑿で方形の孔をあける。ヒノキ板目材。長さ29.9cm、現存の幅3.3cm前後、厚さ1.0cm、柄の長さ約4.0cm、幅3.3cm前後。方孔の一辺1.0cm。SK2101 出土。
- 192は厳密には柄としがたい。両端を鋸で切断し、両側面を粗く削った細長の板材をもちい、両端の一側面の木口付近を浅く削りとして柄風につくる。この部分のほぼ中央には表裏に貫通する円孔を鋸であけ、孔には木釘をのこす。柾目材。長さ28.0cm、幅3.9cm 前後、厚さ1.4

cm。円孔直径0.6cm, 円孔の心心の長さ23.0cm。SK2101 出土。

c くりかたのある板(192・194) 2点とも同形・同大である。192は完形, 194は破片である。長方形の板を横木にとってつくっている。両端を鋸で切断したのち, 長辺の2隅に約1/4円のくりかたをいれている。平面形は斗形の側面形に似る。くりかたをいれない側縁に錐で3

- * 個の円孔をあける。1孔を中央にあけ, 2孔をその左右に同一間隔をおいて穿っている。板目材。長さ29.0cm, 幅14.9cm, 厚さ0.9cm。円孔径0.8cm。2孔間の心心の長さ約12.3cm。192はSK2102 出土。194はSK2101 出土。

d 切り欠きのある木片(195・196) 柱状の小木片の側面中央に切り欠きの溝をまわす。割り材からつくる丸棒を2次的に加工したもので丸棒を鋸で輪切りにし, 縦に4分割した1片。

切り欠き
ある木片

- * 1片は断面を扇形にする柱状の小片で, 中央部分の各稜にV字形の切り欠きをいれ, 溝状に閉鎖さす。195・196にはおのおの割り面が合致する側面があり, 上述のように同一丸棒から加工したことがわかる。長さ7.4cm, 幅と厚さ1.4cm前後。SK2101 出土。

e ロクロ挽き木材(197~201) ロクロ加工の未成品と材の一部に加工痕跡をとどめるものがある。いずれも広葉樹材。すべてSK870から出土した。

ロクロび
きの木材

- * 197 は円柱形的一端木口にロクロの加工面をとどめる。木心をさけた材の側周を木理方向に削って柱状にする。一端の木口は直截面とし, 他端木口をロクロでひく。同心円を呈する刃痕——ロクロ目は, 約1cmの幅で木口面の外縁にめぐり, 外方に向って幾分傾斜し, 中央部分にはロクロ目がなく削って切断している。高さ4.2cm, 直径4.0cm~4.5cm。SK870 出土。

198 は断面が円形に近い多面形柱状材にロクロ目をのこすもの。木心をさけた材の側周を木理方向に削って円柱形にする。一端木口は鋸で切断したのち削って直截面とし, 側周に接する木口の稜は面取りする。他端の木口にはロクロ目をのこし, 木口面上と木口側縁に同心円状のロクロ目がある。側縁のロクロ目は木口に対して斜めにひき, 木口面の直径を縮める。木口面の中心にはロクロ目がなく臍状の突起がのこり, その先端には折欠きの痕跡がある。高さ9.0cm, 直径4.0cm前後。中心突起直径約1.4cm, 高さ0.2cm。SK870 出土。

- * 199 は木口面を表裏にする円板状の材である。全体に腐蝕が進行し, 原形をとどめる部分は少ない。仮りにロクロ目をのこす面を表面, のこさない面を裏面とするならば, 表面は外縁と中心部分を高くのこし, その中間はドーナツ状の浅いくぼみになる。裏面は腐蝕しているが, もとは平滑に削っていたようである。直径8~9cm, 最大の厚さ2.5cm。

200 は木心をさける柱状材を加工し, 上下を木口面とする円柱形のもの。現状では損傷が著しく, 円周の約1/6円をとどめるにすぎない。上下の木口面は腐蝕し, 加工状況不明。側周には木理に直交するロクロ目がある。復原直径12.2cm, 現状の高さ4.5cm。

- * 201 は腐蝕のため外形を損するが, 上下面を木口とする円柱状の材である。一端の木口は卒じて原形をとどめ, 平滑な面になっていたことがわかる。対応する他端木口からは, 砲弾形のくりぬきをロクロびきし, 円筒形に仕上げる。外面は腐蝕しているが, 平滑な木口に接する側周を一段太くする。最大直径5.2cm, 現状の高さ10.2cm。くりぬきの直径2.8cm。

以上の諸例には製品としての完形品はない。しかし, 199は中心につまみをつくる蓋の未成品ともかんがえられ, 196・197はロクロでひきのこした木屑である可能性がつよい。それらがSK870に集中しており, その近辺にロクロびきの工房の存在を想定することができる。